

アスパラガス夏秋どり栽培における茎葉処理法と収量

佐久間 秀明・吉岡 邦雄*

(福島県農業試験場・*相馬農業改良普及所)

Effect of Stem Training and Pruning on the Yield of Asparagus
for Summer and Autumn Production

Hideaki SAKUMA and Kunio YOSHIOKA*

(Fukushima Prefecture Agricultural Experiment Station・)
*Soma Agricultural Extension Service Station

1 はじめに

福島県におけるアスパラガスの栽培面積は、昭和63年度で942ha、うち収穫面積752ha(県経済連調べ)であり、水田転作を中心に年々面積が増加している。

作型は、普通栽培(露地)、半促成栽培が主体であるが、最近7~10月の出荷を目的とした夏秋どり栽培が会津地方において増加の傾向にある。

アスパラガスの夏秋どり栽培では、収穫開始時に、繁茂している茎葉をどのように処理するかが問題となり、本県では、8月中旬に茎葉を刈取り、その後萌芽してくる若茎を普通栽培と同様に収穫する方法(全刈り法)と、7月中旬に地上部を刈らずに誘引し、萌芽してくる若茎をそれまでに繁茂した茎の間から収穫する方法(誘引法又はもぐりどり)の二つの異なった茎葉処理法が実施されてきた。

福島農試では、昭和61~63年にかけて、アスパラガス夏秋どり栽培における有効な茎葉処理法を見出すため、前記二つの茎葉処理法を比較し検討したので、その結果を報告する。

2 試験方法

昭和59年に定植したメリーワシントン500Wの株を用い、春の収穫は行わず夏秋どり専用として試験を実施した。

夏秋どり開始時の茎葉処理法は次のとおりとした。

- (1) 傾斜誘引区…7月20日にキュウリ支柱に、繁茂している茎葉を5°程度傾けて誘引した。
- (2) 直立誘引区…7月20日に畦の両側に支柱を立ててマイカー線を張り茎葉の倒伏を防止した。
- (3) 全刈り区…8月20日及び9月1日(昭和61年は9月10日)に茎葉をすべて刈取った。

なお、傾斜誘引、全刈りは昭和61~63年に、直立誘引は62~63年に処理を実施した。

3 結果及び考察

(1) 収量

図1は、年次別のa当りの販売可能収量を示したものである。なお、春収穫区は、夏秋どりと同じ条件で栽培した株を普通栽培で収穫したものである。

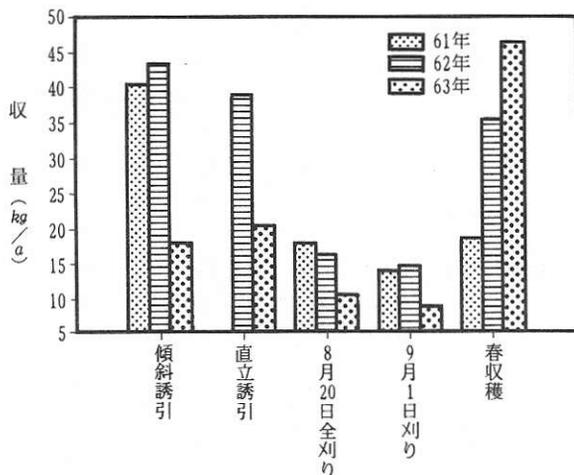


図1 a当り販売可能収量

昭和61年では、傾斜誘引区が40.5kgで8月20日全刈り区の17.8kg、9月10日全刈り区の13.8kgの2倍以上の収量となった。昭和62年は傾斜誘引区が43.3kg、直立誘引区が38.8kgの収量となり、8月20日全刈り区の16.3kg、9月1日全刈り区の14.6kgに対してやはり2倍以上の収量となった。昭和63年は夏秋どりの収穫期間が低温、多雨であったため、萌芽が悪く各区とも低収であったが、誘引区と全刈り区との比較では過去の2年間と同様に誘引区が全刈り区の2倍以上の収量となった。

(2) 品質

表1は、昭和62年のa当りの規格別収量であるが、誘引区はA級収量が総収量の約7割であるのに対し、全刈り区は若茎の穂先が開き、B級、規格外となるものが多く総収量に対するA級、規格内収量の割合が低かった。

収穫した若茎の緑色は、誘引区に比べ全刈り区が濃い傾向であった。

(3) 根の乾物重

図2は、昭和63年に誘引(傾斜誘引)及び全刈り(8月20日)により夏秋どりを実施した株の貯蔵根の乾物重の時期別推移を示したものであるが、生育期間を通じて誘引区が全刈り区よりも貯蔵根の乾物重が多く、また、全刈り区

表1 a当り規格別収量 (昭和62年)

(kg)

区	2L	L	M	S	A級計	B	規格内計	規格外	総収量
1 傾斜誘引	0.73 (1.4)	26.41 (51.2)	5.09 (9.9)	2.96 (5.7)	35.19 (68.3)	8.15 (15.8)	43.34 (84.1)	8.21 (15.9)	51.55
2 直立誘引	1.52 (3.2)	22.16 (46.1)	5.77 (12.0)	2.17 (4.5)	31.62 (65.8)	7.19 (15.0)	38.81 (80.8)	9.24 (19.2)	48.05
3 全刈り(8月20日)	2.24 (8.7)	7.52 (29.1)	1.76 (6.8)	0.85 (3.3)	12.37 (47.9)	3.89 (15.1)	16.26 (63.0)	9.55 (37.0)	25.81
4 全刈り(9月1日)	0.49 (1.9)	6.34 (24.7)	1.74 (6.8)	0.62 (2.4)	9.19 (35.8)	5.36 (20.9)	14.55 (56.6)	11.14 (43.4)	25.69
5 春収穫	4.54 (10.4)	12.56 (28.7)	1.41 (3.2)	0.56 (1.3)	19.07 (43.5)	16.42 (37.5)	35.49 (81.0)	8.34 (19.0)	43.83

注. 春収穫の収穫期間は4月22日～5月29日 ()内は総収量に対する割合

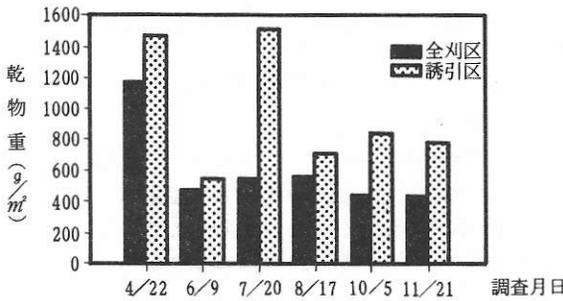


図2 貯蔵根乾物重の時期別推移 (昭和63年)

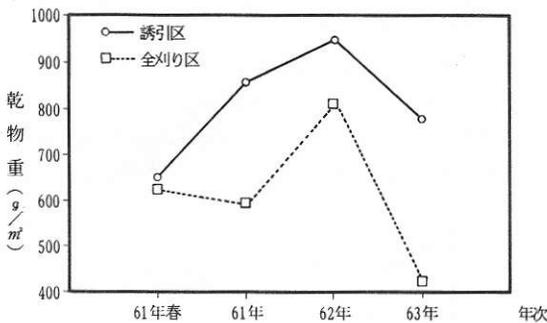


図3 生育終了時(11月中旬)の貯蔵根乾物重

では8月以降、貯蔵根の乾物重が減少したのに対し、誘引区ではやや増加する傾向であった。

また、図3は、生育終了時である11月中旬の貯蔵根の乾物重を年次別に比較したものであるが、年次間の変動は大きいものの、貯蔵根の乾物重は、各年次とも誘引区が全刈

り区よりも多くなっていた。

誘引区と全刈り区との貯蔵根の乾物重の差は、収穫期間における茎葉の有無、つまり、全刈り区においては収穫期間には繁茂している茎葉がなく、収穫によって株の貯蔵養分が消費されるのみであるが、誘引区では収穫期間においても茎葉が繁茂しており、収穫による貯蔵養分の消費と同時に、繁茂している茎葉によって養分の生産、蓄積が行われるという差によって生じているものと考えられ、この貯蔵根の乾物重の差が、両区の収量差となって現われているものと推察される。

4. ま と め

以上の結果から、アスパラガスの夏秋どり栽培における茎葉処理法としては収量、品質の点から誘引法が有効であると判断された。

また、傾斜誘引と直立誘引を比較すると、傾斜誘引は茎葉が重なり合うため茎枯病やムレの発生が多い傾向が見られ、特に、雨の多かった昭和63年には、傾斜誘引区は9月までに茎葉が枯れ上がり、直立誘引区に比べ収量が少なかったことから、直立誘引が適当と思われる。加えて、傾斜誘引の場合はキュウリ支柱等の資材が必要となるため、経費の点からも直立誘引が有利であろう。

しかし、誘引法による夏秋どり栽培では、収穫した若茎の緑色が淡く、また、収穫中の茎枯病や茎葉のムレの発生が多いため、実際の栽培では、(1)夏秋どり開始時に、枯死茎及び弱小茎を除去し、また、地上から50cm以下の下枝をかき取り、株元への通風、採光を良くすること、(2)夏秋どり開始までに特に、梅雨期を中心に病害虫防除(薬剤散布)を実施し、茎枯病の発生を抑えること、に留意することが必要である。